

# 瓦窯の下から陶器窯を発見

城ヶ谷遺跡（大田市）2014年調査

久保田一朗

大田市久手町の近代の瓦窯を調査していた時でした。

「今の窯の下にもう一つ窯が隠れているかもしれない!」。調査の終盤になって、同僚の予言どおり瓦窯の下から別の窯が現れ、私は頭を抱えました…。

この「予言」には根拠があり、「瓦」を焼く窯なのに、「陶器」を焼く窯道具がたくさん見つかったのです。地表面に一部見えていた上の瓦窯が新しく、瓦窯の下層に埋まっていた陶器窯が古いという前後関係です。陶器窯は明治時代中頃の19世紀後葉、瓦窯は昭和前期に開かれたものでした。

どちらも部屋がたくさん連なる形の「連房式登り窯」です。ただし、陶器窯の各部屋は床面がほぼ平ら。一方、瓦窯の一部屋はたくさんの瓦を詰め込むため階段状に作られます。窯道具も大きく異なります。瓦を焼くために必要なのは、「ハセ」や「モミツチ」と呼ばれるきのご形やようかん形の土製品で、瓦の間にはさむことで重ね焼きを可能にします。陶器の窯道具の代表は「ヌケ」と呼ばれる円い焼成台で、窯の中に焼成台を立てて製品を持ち上げ高い位置まで詰め込むので、床置きだけの場合よりも多く窯詰めできます。

陶器窯から石州瓦窯へ、大田市東部の近代産業の移り変わりがよくわかる窯の一つです。

（島根県古代文化センター専門研究員）



連房式の登り窯